

提出日： 令和 2 年 12 月 20 日

聖徳大学大学院 博士前期課程

通信教育課程

【要旨】

保育者養成校における学生の歌唱法の指導に関する研究

— 「子どもと音楽」の授業実践を通して—

Investigating the Practical Training of a Student in an early Childhood Education
Program in Singing Method through “Small Children and Music”

児童学研究科 児童文化学専攻

2001-180008 福士 亜友子

指導教官 阿部 真美子先生

1. 背景

筆者は、保育者養成校で音楽を担当する教員として、保育者を目指す学生の音楽表現に関する質の向上に努める必要性を感じている。文献研究をしたところ、子どもの音楽活動で必要なピアノの演奏に関しては、読譜用アプリの開発や ICT 活用など、多様な研究が見られる。一方で、子どもと一緒に歌ったりお話ししたりするために重要な、「声」の研究は少ない。普段、何気なく発している「声」であるが、それが発せられる身体的全構造をリアルタイムで可視化することは困難で、コントロール方法は未知の部分が多いからであろう。しかし、教師の音声障害についての研究からもわかるように、保育者の発声は問題視されている。

未知の部分の多い「声」であるが、正しい発声から導かれる、豊かな声量・音色・表現力の歌唱は、聞く者の心をとらえ魅了する。そのような保育者の歌唱が、子どもの「豊かな感性と表現」に相応しいのは、言うまでもない。子どもは様々なことを模倣して習得していくため、保育者が豊かな歌唱表現であれば、子どもの歌唱表現も自ずと豊かになると考えられる。

2. 目的

学生の教育実習・保育実習では、ピアノの技術不足と並んで、歌ったり話したりする声小さいという現場からの指摘がある。また、音程のずれが著しい実習生に対して、子どもたちに耳を塞ぐそぶりが見られた、という話も聞く。実際、実習巡回で学生たちの様子を見に行くと、実習後半には喉を傷めて声が出なくなっている者が見られた。これは、無理に声を張り上げて、喉に負担をかけてしまった結果である。残念ながら、学生は発声法を身につけているとは言えない状況であり、声帯に負担のかからない発声法を修得し、現場に出てほしいと思う。

また、授業の中で、学生たちに「春がきた」(文部省唱歌)のイメージを書いてもらった。一人ひとりのイメージを読むと、「春の訪れ・桜が咲いている・小鳥のさえずり」などが書かれているが、具体性に欠け、実際に体験したイメージというよりも、まるでテレビの画面を見ているかのようなありきたりなイメージが伝わってくるのが感じられた。もしかしたら、学生たちの原体験が減っているのではないだろうか。領域「表現」の「豊かな感性と表現」は、原体験から培われるものである。「表現」とは感性をもって内面に描いたイメージを、技術をもって外化することである。しかし、表現にとって重要なのは「技術」の

部分ではなく、「感性」の部分である。感性が乏しければ、いくら技術を磨いたところで、豊かな表現はできない。感性は、原体験でしか身につけられないが、指先だけで触ったのと全身でかかわったのでは、感じ取り方の質が違う。「豊かな感性と表現」を育むためには、全身で思いきり環境にかかわる原体験が必要なのである。

つまり、保育者を目指す学生の歌唱の問題点は、歌唱技術と原体験の不足にある。そのためには、保育者養成校において、学生の歌唱力を向上させ、豊かな感性を育む原体験をさせることである。その結果、保育者だけでなく、子どもたちのよりよい音楽表現にも貢献すると考える。

3. 方法

文献研究をしたところ、「保育者の歌声」「幼児の歌声」「発声法（感情）」「発声法（身体構造）」の4種類あり、それらより導かれた仮説をまとめると、次のようになる。保育者は、どなり声を用いることなく、歌唱技術を高めることが必要である。そのためには、「感情」によって発声器官を働かせる発声法を身につけることである。指導には、筆者の音楽家としての「経験的知識」も交える。また、歌唱技術だけではなく、歌で子どもたちを楽しませるために、原体験による豊かな表現力も身につける必要がある。そして、保育者養成校の限られた授業時数のグループレッスンにおいて個人の状態を把握するために、単独歌唱の録音を実施する。その録音をもとに指導と評価をし、歌唱力の向上と表現されているかについて調べる。

この仮説をもとに、指導法と授業計画を立てる。指導法は、①発声のしくみ—最低限の知識として、②「感情」による呼吸法・ハミング・母音練習・高音練習、③演技のメソッド、④表情と声、⑤評価、を考案する（③と④は、授業の中で春の風景を体験しに行くことは難しいため、原体験を補うものとしてイメージを作り出す練習である）。授業計画は、最初の20分間で歌唱法の指導を実施し、全15回の授業のうち計3回、単独歌唱の録音をする。学生には毎回、ヴォーカル・チェックシートを記入してもらい、その中の「感想」から、授業の疑問や理解できなかった点など、気になる感想を取り上げ、次回の指導法や声かけに反映させる。

実際の授業を進めていく過程で、学生が理解できなかった場合、筆者の経験的知識も加えて、指導していった。たとえば、ハミング練習では、頭（つむじ）に響くイメージが理解できなかったため、実際につむじの辺りの髪の毛を上を引き上げて、イメージしやすく

した。これは、筆者が声楽を学んできた上での経験的知識である。そして、学生たちの意識化のために、毎回、「歌は感情」であるということを声かけしながら、指導をした。様々なトレーニングを実施するが、重要なのはトレーニング方法ではなく、「思わぬ嬉しい感情、外に意識を向ける」ということである。

4. 結論

評価のために、単独歌唱の録音をした。使用曲は「春がきた」（文部省唱歌）である。1 番の歌詞は全部で 30 音節あり、その一つひとつの音量・音程を、音楽的素養のある判定者 4 名で評価した。最終的には、音量が向上し音程が良く、子どもたちに歌いかけるような美しい声で、春が来たという喜びの気持ちを表現した曲に仕上がったと考える。

本授業研究は、文献研究に基づいて仮説を立て実践された。その過程で、指導の役割も加味された。学生が課題を理解し、意識し、努力するよう促したことである。また、単独歌唱の録音時、クラスの仲間の励ましも強い促しとなっていた。幸いなことに学生 36 名、一人も脱落することなく熱心に受講し、この授業研究に協力してくれた。授業の後半になると、学生たちは、「音量」と「音程」の向上だけでなく、「歌唱表現」の部分にまで意識を向けるようになった。学生たちの「感想」から、歌唱技術や表現力の向上が実感でき、やりがいを見出している様子がわかった。また、録音中、聞いている学生たちの様子にも変化が見られた。最初は、自身の演奏だけで精一杯で、終わると集中力が切れたようにおしゃべりを始める者もいた。しかし、録音回を経るごとに、一人ひとりの歌唱にしっかりと耳を傾け、応援する様子も見られ、演奏が終わると大きな拍手を送っていた。まるで、子どもたちの発表を温かく見守るようであった。

歌の初心者であった多くの学生が、この半年間で保育者として必要な歌唱力を身につけ、子どものうたを表現する段階に到達したと考える。それだけではなく、録音の場において、他の学生の歌唱を温かく見守るという、保育者として必要な資質も芽生えている。この授業研究は、保育者としての音楽表現の質の向上につながる、よい機会となったのではないだろうか。

今後の研究課題は、原体験を授業の中に取り入れることである。今回は、イメージを補う練習を行なったが、本来であれば、実際の体験を通して「豊かな感性と表現」につなげていくことが重要である。松原・門屋(1998)のニワトリの絵を描かせた研究のように、春の動植物を取り入れることはできるかもしれない。今後の研究につなげていきたい。